

ダイアリー
考古研歳時記

活動のあゆみ

1984年度

5月26日

五ヶ山古墳見学会

5月31日

勉強会「弥生時代前期」

6月7日

勉強会「弥生時代中期」

6月14日

勉強会「弥生時代後期」

6月27日

新歓コンパ

7月3～20日

滋賀県延勝寺湖底遺跡発掘調査

7月25～28日

滋賀県尾上遺跡発掘調査

9月3日

宝塚市仁川高台遺跡試掘調査

9月13～16日

川西市「祖先の足跡展」手伝い

10月4日

勉強会「古墳へのアプローチ」

10月13日

雲雀山西尾根古墳群B支群実測調査（なお
本調査の経過は本文に詳しいので以下省略する。）

10月13日

勉強会「古墳時代前期」

10月18日

勉強会「古墳時代中期」

10月23日

勉強会「古墳時代後期」

10月27日

飛鳥見学会

11月2日

正倉院展見学

11月8日

勉強会「長尾山の古墳群梗概」

11月15日

勉強会「土師器」

11月22日

勉強会「須恵器」

11月29日

勉強会「埴輪」

12月6日

勉強会「古墳時代の生活」



12月13日

勉強会「古代朝鮮の歴史的推移と墳墓の変
遷—あらまし」

12月22日

忘年会

1月7日

中筋山手古墳群見学

1月19日

勉強会「日本古墳文化論」

3月4日

追い出しコンパ

1985年度

4月21日

播磨大中遺跡と石の宝殿見学会

5月15日

勉強会「日本古墳文化論」

6月4日

勉強会「農耕文化の形成」

6月7日

新歓コンパ

6月9日

河内飛鳥見学会

6月12日

勉強会「考古学へのアプローチ」

6月18日

勉強会「長尾山の古墳群」

6月25日

勉強会「弥生土器その他」

7月8～8月9日

滋賀県草津市烏丸崎遺跡発掘調査



9月8日

岩橋千塚見学会

10月9日

勉強会「食生活の変遷」

10月15日

勉強会「石塔について」

10月22日

勉強会「古鏡」

10月27日

桜井・三輪見学会

10月29日

勉強会「古代の山城」

10月28～12月27日

川西市栄根遺跡発掘調査

11月12日

勉強会「雲雀山東尾根B支群に関する2・3の見解」

11月19日

勉強会「畿内における古墳の終末」(25・29日の3日間に分けて行う。)

12月6日

勉強会「十千と十二支のはなし」

12月13日

勉強会「八十塚古墳群について」

12月20日

勉強会「石造塔について(2)」

12月22日

高句麗文化展と忘年会

1月14日

勉強会「木造塔について」

1月24日

勉強会「中世の城郭」

1月28・29日

川西市山下地区文化財分布調査

3月3～7日

宝塚市遺物整理

ああ、尾上物語

佐々木 尚子

延勝寺での調査を終えて、一行は7月23日から7月28日まで尾上温泉にある尾上荘の跡地に現場を移したのです。尾上においては、すでに明らかにされていた各々の恐るべき姿が全開したといえるのではないのでしょうか。延勝寺の2週目のメンバーであった1・2回生に4回生の赤山さんが加わって、計6人で尾上の生活がくりひろげられたのです。初日の1回生の変貌ぶりに、赤山さんはとまどいつつも、しかしすぐに異常な雰囲気にとけこまれたのです。

尾上では嶋田屋さんという民宿にお世話になりました。

初日は荷物を置いてすぐに現場に向かうと、あのなつかしい兼康さんたちがいらっしたのです。兼康さんは「いいもん見したるか」と言われ、私たちはすぐにその話にのりました。「まっすぐ行ったらあるから」の言葉をたよりに道をすすむと、まっすぐの道はなかったのです。とりあえず道を歩いていくと、目的地にたどりついたのです。しかしあの道は、方向がさっぱりの私一人だったらきくと帰らぬ人となったでしょう。あの道は右に曲がってたのでは…？（いえ、私は方向音痴です。ハイ）

尾上温泉という地名からして、私はきっとお風呂は温泉だっ！とルンルンしていました。作業のあとの温泉!! ウーンすごいと思っていたところ、お風呂は我が家愛用のバスクリンでした。チャンチャン。

翌日24日は作業に入れず、兼康さんおすすめの渡岸寺の十一面観音を見学に行きました。一同「すばらしい」のひとこと、この時こそ未来の仏教考古学者が生まれた瞬間だったの

であります。

3日目から、あの矢板の中の蒸し風呂地獄の中での作業がはじまりました。次から次へとわき出す水は、ポンプも必死に働いていました。私たちは各々道具を手し、腰痛と肩こりとたたかい、暑さのためボーっとした頭で、しかし、何か出ないかとガリガリ一生懸命にやってたのです。（しかし、目ざす人形代や馬形代は、私達がおひまを頂き、各々が家ですごしているところに出てきたのでありました。）作業のあいまに兼康さんのスコップの使い方講座がひらかれました。6人の中で白江さんが優秀で、「形のまま飛ぶ」のでした。ちなみに私はバラバラにちらばってました。Sさんはスコップを使用してエッサホッサしていると、奈良さんに「Sさーん、白江君にかけちゃだめだよ」と言われたものでした。Sさんは体が小さく、スコップに振り回されている様でした。ところで、私の神様とも言えるユンボ高橋さんは、風邪ぎみで元気がなかったのです。しかし、高橋さんの作業のあいまのあの、「アチュー」「なんですかぁ」は、私の心をなごませてくれたものでした。3日目からはじまった作業も、暑さのためみんなの脳をくるわせ、意味もなく笑い出すという恐ろしい現象をもたらしました。ケラケラ笑いつつスコップを振り回すあの姿…もう末期だったに違いありません。脳ミソが発酵したのでしょうか？！

さて、作業の話はこれくらいにして、作業のあとの恐ろしい話をしてみたいと思います。とにかく泥沼でした。部屋ではごろっと寝ころがって夜中までワニのおもちゃをピーピーならし、話しこんだり、酒盛、肝だめし、花火などをくりひろげたのです。毎夜ハードなスケジュールでした。おじさん夜あそびご

めんなさい。

こんな事をくり広げつつ夜は深まり、朝は、嶋田屋さんのあのおじさんの「おきよー」の叫び声でさわやかに目ざめたのであります。おじさんの叫び声に対し、「ヘーィ」と元気よく答えた方が約1名いらっしゃいました。大変不健全な夜を過しつつも、昼は元気に作業する健全な大学生に変身していたのであります。よく病気ひとつせずに帰ってきたなあ。やっぱりパワーのもとは何たってマスちゃんのおかげだったのではないのでしょうか。延勝寺にひきつづき、マスの大変おいしいこの地方ですから、毎夜欠かすことはありません。決してマスがきらいなわけではありません。ただあまりに慣れ親しみすぎたのかもしれない。夕方になると、「さあ、今日は煮てるか焼いたのかそれとも…」と調理法の当てっこなんかもしたりしていました。ああ、山田さん、どうしてあの時いらっしゃらなかったのかと…。そうです、「私、お魚大好きです」と言いつつマスをたいらげる姿を見せてほしかった。しばらくマスを食べる気にならなかったのは私だけでしょうか。

尾上での異常な世界のみを書かせていただきました。すべてを書き表わすことは不可能でしたが、あのころの様子が少しでも思いうかべられたらと思います。

様々とお世話になりました兼康さん、奈良さん、高橋さん、山崎さん、その他の方々、嶋田屋の方々、本当にありがとうございました。また、この「ああ、尾上物語」に登場していただいた方々に失礼をおわびします。

後日談として、尾上の人形代、馬形代などに関しては、新聞やテレビで報道されました。私はテレビを見のがして、あの坂本龍一に似た奈良さんがテレビに出ているところが見た

かった!!今度どなたかテレビに出られる際には、ぜひ知らせていただきたいと思います。私は見ます!!

雲雀山西尾根古墳群B支群調査

— 実測調査にいたる過程

および現在における展望 —

白江 人智

「関学考古8号」を出すべく、調査は84年10月13日のB支群下見から始まった。そして我々は「関学考古6号」に報告された以外の古墳のうち、3・4・5・13・14・15各墳の墳丘測量および3・4号墳の石室実測に着手したのであった。中心になるべき一・二回生は（私も含めて）、これまで古墳の測量などしたことがなく、調査は難行を極めた。いや、これを書いている現在においてもそうなのである。それはまさに試行錯誤の連続であった。まず平板測量の基本から身につけねばならなかった。それをマスターした上で、四回生の方々を煩わしながら3号墳の石室実測と墳丘測量にとりかかったのであった。かくて我々は赤山氏の下宿をアジトにして、土・日はひたすら雲雀へとかようことになったのである。当初、年内に一応の報告ができるとは言わないまでも測量ぐらい終わらせることができるであろうという甘い予測があったのであるが、どっこい測量は現在も続けられているというのが現状なのである。

しかし、ここへきて一応のメドがたつようになった。測量の方はほぼ終わりに近く、最後に残った難関である4号墳の石室実測もこの小冊子が刊行されるころにはほぼ終了を見ているであろうからである。

以上のようなわけで、「関学考古8号」発行の夢も85年度中には実現できそうであり、

それは今回の調査にあたり、多くの方々に御指導をいただき、現在も御指導をいただいていることをここに記して謝したいと思います。

なお、詳しい調査経過および反省点は調査の終了をもって何らかの形で報告したいと思います。

——「どっこい」以来10カ月

原稿・写真・整図もあと一歩!!

松林 宏典

1984年度中はあれ程集中的に行なわれていた調査も芳しき「赤山邸」という一大拠点を失ってのち、加茂収蔵庫へ移ってからは1と月に多くて3日、少ない日は1日とやや怠慢さみであり乍らも12月26日の11号墳墳丘実測図をもって終わり、写真撮影もあと遠景と若干の補足をのこすのみである。なにしろ今年は、いわば「たま」にしか調査をしなかったため、1回毎の集中度が高くまじめテキパキで事件らしい事件もなかったように思う。若し、仮にあったとしてもそれは作業の密度の濃さの中で溶けてしまっているだろう。

5月に新入生が入ってきていきなり測量に行き、一年生達があまりにのみこみが早いので私達古顔はややおそれおのいたのであった。やはり早くから技術を身につけておくのはよいと思う。筆者自身も一年の時は現場にでてからかなりかかって修得したように記憶している。

さて、報告書の原稿もあら方できあがり、いよいよ実務的作業に入るわけだが、同時に次のフィールドへもそろそろ足がかりをつけておいた方がよさそうである。岡野氏とも少し話したのであるが、渡部氏のプッシュもあって、中山寺周辺の兼康氏の云う石棺仏も含めて、白鳥塚などの測量調査をしてみてもと思う。No.8 整理がてら、少しづつその辺の資

料収集もはじめてはいかがだろうか。

1年前にくらべ、要領を得たのか、測量作業も円滑かつスピーディにできるようになった。今後も、発掘を目標とせず、保存を目標とする現状測量調査を基盤とした活動をつづけていきたい。

一年をふりかえって

奥谷 聖子

この一年間は、考古学研究会としての行事にほとんど参加していなかったので特に印象的なことはありませんでした。けれども私は時間割の都合で研究室内の出来事はわりと把握している気です。

春の勧誘作戦（といってもポスターをかいただけですが）によって一回生の人たちが入ってくれたために四回生の抜けた寂しい会にも活気がついてきました。活気がついたついでに、いすはこわれる、かびははえる、ねずみはさがさという、私のかばんは水たまりにはまる、というような、その前の年には考えもつかなかったようなことが研究室内で次々と起りました。どれも楽しい思い出ですと言いたいところですが、上にあげたようなことは今年も起りうる事が十分に考えられます。みなさん、研究室内での行動は、くれぐれも慎重に、そして研究室内の細かい観察を励行していきましょう！いすがこわれれば新しい物を自費で買うもしくはどこからか拝借してくる、かびが生えればカビキラーで退治する、ねずみが出れば素手ででもつかまえて甲山にでも持っていく、かばんを水にはめれば中芝で全部ひろげてかわかすもしくは新しいものを買う、このような努力をしてほしいものです。私はみなさんがやってくれることを期待しているのです。私はしません。